

---

**M S W**

景雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M S W

### 【Nコード】

N 4 5 9 1 T

### 【作者名】

景雪

### 【あらすじ】

牧岡誠は市役所に勤める独身の32歳。4月1日の辞令交付で、市立病院への異動を命じられた。異動先の総務課長から言い渡された彼の業務は、「MSW」。それはメデイカル・ソーシャル・ワーカーといい、事務職である牧岡からは縁遠いと思われた福祉専門職だった。彼は精神病棟に配属され、しかし同僚の入江真紀に癒されて何とか業務をこなしていく。自殺志願の女、戦争が終わったことを知らない老人、セックスによってしか愛情を受けたことがない少女。様々な患者と対することにより、牧岡はMSWとして成長して

11  
<

## 寝耳に水

「MSWだ」

「は？」

思わずそう声に出してしまった。

「メデイカル・ソーシャル・ワーカーだ」

「あ、一応知っています」

そうじゃない。俺がまぬけな声を出してしまったのは、黒島課長が言った言葉の意味が分からなかったからではなく、自分がこの市立病院でMSWをやれと言われたからだ。

「私は、事務職ですが」

「主事は持っているだろう？ 社会福祉主事任用資格」

「三科目主事ですよ。法学部だったから法学、民法、行政法の三科目を履修してただけです」

「保護のワーカーをやっていたらどう？」

「そりゃ、生保のワーカーなら事務職でもできますが、MSWは国家資格を持っている専門の福祉職がやる仕事ですよね？」

「牧岡。人口が百万人を超えるような政令市ならともかく、うちのような小さな中核市では、福祉職などそうそう集まらないんだ。

だから事務職が福祉職をやらなければいけない場合が多々ある。資格はおいおい取ってもらおう。社会福祉士か精神保健福祉士」

「MSWって医療ソーシャルワーカーですよ？ 入院患者の相談や援助をするような。私にできるかどうか……」

「できるかどうかじゃない、やるんだ。君の所属は精神病棟だ」

「……へ？」

## マキちゃん

四月一日の辞令交付で「市立病院総務部総務課付」という辞令を渡され、「総務課付」の「付」が気になったが、てっきり病院経営部門が経理でもやるのかと思っていた。

それがMSWだと？ 何で事務職の俺が、福祉の専門職をやらされるんだ。民間企業を辞め、二十六で入庁した市役所で、生活福祉課に配属され生活保護のケースワーカーを六年やった。異動希望は税務課、広報課、都市整備課と書いたはずなのにまた福祉かよ。しかも精神病棟に配属？ こっちの頭がどうかしそつだよ。

MSWと聞かされた衝撃から、二年前まで生活福祉課長だった黒島課長の席の前に呆然と立ち尽くしていると、後ろから声をかけられた。

「牧岡さん。職場にご案内します」

振り返ると、白衣に大きな瞳が生える女性職員が立っていた。口元が少し緩められ、薄い唇がてらてらと部屋の照明を反射して輝いて見える。生活福祉課の頃は若い女性職員は皆無だったから、彼女がまぶし過ぎてやや目を細めてしまった。

「精神病棟でMSWをしている入江と申します。二年目です。それまでは地区センターで事務をしていました。よろしく願いします」

「あ……よろしく願います」

急いで頭を下げた。俺を見る黒島課長の目元がにやにやしている気がして、課長が視界の端に入らないように気をつけた。

精神病棟に向かう途中、廊下を歩きながら、俺は入江さんを「マキちゃん」と心の中で呼ぶことに決めた。彼女のネームプレートに「入江真紀」と書かれていたからだ。彼女の真横ではなく斜め後ろを歩きながら、一つに髪をまとめているため露わになっているうな

じを、何度も盗み見た。左手の薬指には指輪をしていない。仕事だから外しているという可能性もあるが。

「牧岡さん、前職は生活福祉課ですよね？」

「ええ。ワーカーをやっていました」

「それなら、仕事に慣れるのも早そうですね」

早くないよ、マキちゃん。精神病棟つて、頭のネジが何本もぶっ飛んだ人達が閉じ込められているんでしょ？ 僕、君だけを心の支えにしよう。うん。決めた。

廊下ですれ違うナースは何故だかみんな可愛い。俺は、男だけでむさ苦しかった生活福祉課を思い浮かべ、ある意味ここは天国かもしれないと妄想した。

「牧岡さん。スーツじゃなくて私服で通勤して平気ですよ。仕事中は白衣に着替えるので」

「あ、はい」

初めて着る白衣に戸惑いながら何とか袖を通すと、いきなりMSWとして働き始めると言う。研修は？ そう聞く俺に、マキちゃんは「後日です」とだけ答えた。習うよりも慣れる、か。身体で覚えるってことかよ畜生。

「あの、マニュアルとかは？」

「患者さんは一人一人違うんです。だからマニュアルなんてありません」

マキちゃん……。生活福祉課にだってマニュアルはあったぜ。

## 初仕事

精神病棟に入る扉は、防弾ガラスのように分厚かった。二か所に鍵がかけられてあり、管理は厳重だ。生保のワーカーをしていた時、市立病院の精神病棟は何度か来たことがあるので、特に驚きはしなかった。

中に入ると、談話室のように設けられたスペースで、下を向きながら、同じような表情をし、黙って座っている患者が何人も目につく。人は精神に異常をきたすと、同じような顔になるのだろうか。患者たちは兄弟か親類にしか見えない。

「今から行く病室の方は、鈴木数子さんという、五十代の女性です。自殺願望が強くて、先月入院されました。牧岡さんに担当していただく予定です」

マキちゃんが病室の内の一つに入ると、俺も従った。

「先生……」

俺たちの姿を見つけると、鈴木はそう声に出した。白衣を着ていればみんな「先生」に見えるのだろう。鈴木はベッドの端に足を揃えて座り、暗い病室に佇むようにじっとしている。年齢よりも上に見える。体型はやや小太りで、眼鏡をかけている。

「先生、屋上から飛び降りるのと、ロープで首をくくると、どっちが楽ですか？」

「鈴木さん。ちょっとお外にでも出しましょうか？ 天気もいいし。まず窓を開けて空気の入れ替えをしましょう」

窓に向かって歩くマキちゃんに鈴木が声をかける。さっきよりも声がやや大きい。

「やだ。開けないで。やだ」

それから一時間ばかり鈴木と話したが、特に何の進展もなく、話はどうどう巡りだった。鈴木 of 病室を後にしてまた数人の患者と話したが、どいつもこいつも同じような奴らばかりだった。

「どうでした？ MSWの仕事は」

定時が終わって事務所に戻ると、マキちゃんに聞かれた。

どうでしたって、酷な質問だね。うんざりだよ。正直に言っと。

俺、やっぱり福祉はむかねーや。早速今年異動希望出そうっと。

「まあ、まださわっただけです」

どうでもいいような回答をしてしまった自分が憎らしかった。

もう定時は終わっているのに、庶務担当に声をかけられ、各種届出を書かされた。市立病院は市の組織ではあるが、水道局、交通局と並んで企業会計という別のお財布で運営されている。それ以外の部署から企業会計の部署に移動した者は、一旦辞職し、また採用されるという手続きを踏む。そのため住居手当や通勤手当等の届出をもう一度しなければならぬのだ。面倒くさいことこの上ない。

（やってらんねーよ）

誰にも聞こえないように独り言を言った。

## 自殺志願者

次の日、俺は早くも一人で鈴木の手手をさせられた。

マキちゃん、ひどいよ。一人でこんなババアの世話はやだよ。

「先生、屋上から飛び降りると、ロープで首をくくると、どつちが楽ですか？」

「窓でも開けましょうか」

「やだ。いやだ」

「でも、閉め切っていると空気が濁るし」

「空気が見えるの？ 先生」

「いや、見えないけど」

「嘘つき。先生の嘘つき！ 出てって！」

こうして俺は鈴木に三十秒で追い出された。仕方がないので、昨日マキちゃんと訪問した十人ばかりの病室を適当に回り、どうでもいい会話で時間をつぶした。

翌日、鈴木 of 病室をまた訪問する。

「先生、屋上から飛び降りると、ロープで首をくくると、どつちが楽ですか？」

しめた。昨日のことは忘れているか、少なくとも根に持っていないな。

「どつちも苦しいよ」

「生きてる方が苦しい」

「そんなことはないよ」

「何で？」

「いいことだってあるよ」

「例えば？」

「うーんと……そうだな……」

「出てっつてよー！」

## たる吉

翌々日、懲りもしないで鈴木 of 病室を訪れた。

「先生、屋上から飛び降りるのと、ロープで首をくくるとのこと、どつちが楽ですか？」

「鈴木さん。何で部屋を閉め切っているの？」

「犬が、逃げないように」

「は？」

「犬、飼っていたんですよ。まだいますよ。家に」

「ああ。部屋を閉め切る癖がついちゃったのね？」

「可愛いよ、うちの犬。たる吉って言うの。毛が白くてきれい」

「今はどうしているの？ たも吉」

「たる吉だよ。間違わないで！ 今も家にいるはずよ」

「え？ 閉め切った部屋に？ エサは？」

「ドックフードを畳の上にまき散らして来た」

「それじゃ足りないでしょう？」

「大丈夫。たる吉は頭の良い子だから。連れて来て見せてあげただよ」

「見せてよ。白くてきれいな犬なんでしょう？ 見たいな、約束だよ」

それから鈴木 of 症状は一気に回復し、三日後に退院にこぎつけた。

「やるじゃないですか。牧岡さん」

マキちゃんが笑うと八重歯がきらりと光る。この八重歯を見ることだけが唯一の楽しみだな。俺は思った。

次の日、鈴木は約束通り飼い犬を連れてきた。白い毛並みは意外と美しく、彼女の言ったことは嘘ではなかった。

「たほ吉、可愛いですね」

「たる吉だつてば！」

## 中尉殿

鈴木が去った後、俺にとって一番の強敵は田中正八だった。大正八年生まれだから正八。認知症が変な方向に特化した九十過ぎの爺さんだ。日本刀を振り回しているところを取り押さえられて措置入院した。

「田中さん。お体の調子はどうですか？」

「若造、恐れ多くもわしは士官だぞ。誰に口を聞いているんだ」

田中は元陸軍中尉だった。

「失礼しました、中尉殿」

「うむ。以降気をつけよ」

田中は厄介だった。自分が陸軍中尉のままで、まだ戦争が続いていると思いついでいる。少しでも機嫌を損ねると大声でどなり散らし、周りを恫喝した。

「中尉殿」

「何だ」

「何か、用事がありますでしょうか」

「ない」

そのような無意味なやり取りが続いた。MSWが担当する主要業務に、退院援助、社会復帰援助がある。田中に対してどうやって援助を行うか。俺はさっぱり分からなかった。

「入江さん。どうすればいいですかね？ 田中正八」

マキちゃんは考えるように少し虚空を見つめて、おもむろに口を開いた。

「話を聞いてあげることしか、できないと思います」

マキちゃん……。

俺は毎日三回、田中の病室を訪ねた。彼はいつも、ベッドに正座していた。

「中尉殿」

「何だ」

「中尉殿は、どんな任務をおわれているんですか？」

「そんなことは言えん。軍事機密だ。房総半島から敵が上陸してくることなど言えん」

「敵が、上陸するんですか？」

「何、貴様、今何と言った！ どこで聞いた！ 貴様スパイか！」

## 老兵死す

MSWになって三週間が過ぎた。どれもこれも同じ顔に見えていた患者一人一人の、見分けがつくようになっていた。

「中尉殿」

「何だ」

「中尉殿は、いつまで戦闘を継続なさるのですか？」

「命令が続く限りずっとだ」

「今、何年だかご存知ですか？」

「何年だ？ 昭和二十一年か？」

「昭和八十六年です」

「もうそんなに経ったのか。大元帥閣下は？」

「大元帥閣下？」

「天皇陛下だ。貴様本当に日本人か？」

「天皇陛下ならお元気でですよ」

「今年でおいくつだ」

昭和天皇は、確か二十二年前に八十七歳で亡くなったはずだ。

「一一〇歳くらいにはなられています」

「さすが現人神だな。ご長寿だ」

「ええ」

「わしは、わしは何歳になった？」

「今年で九十二歳です」

田中は答えなかった。ただじつと病室の隅の暗がりを見つめているように視線を固定していた。入れ歯が入っていない口元はしばらくのように見え、くぼんだ瞳は皺に埋もれて小さな点のように思えた。

「のう、貴様」

「はい」

「わしは、何のために戦っているんだ？」

「……」

「わしのやっていることは、間違っているか？」

「いえ……間違つては、いないと思います。中尉殿は、間違つたことをしているとは、お思いではないでしょうか？」

「それは、そうだ」

田中は窓の外を見ていた。つい最近まで花を咲かせていた桜は、枝に葉をたくさん茂らせていた。

「貴様、若い割にわしの話をしっかり聞くとは珍しいやつだな」

「いえ。自分は聞くことしかできませんから」

「今までの職員は、頭ごなしに決めつけて話を打ち切るやつばかりだった。貴様は違う。わしの話をちゃんと聞いている」

「中尉殿」

「わしも、いつも頭がおかしいわけではない。たまに正常に戻ることもあるんだ」

田中が笑った。皺だらけの顔が余計に皺くちやになった。

翌朝、バイタルチェックに訪れた看護師が、死んでいる田中を見つけた。彼はベッドに横たわりながら、静かに息を引き取っていた。枕の下には、達筆な縦書きで田中の遺言が残されていた。「俺の中に違う自分がいる」「頭では分かっているつもりなのに、どうしようもない」「どうすればいいんだ。分からない。頭がこんがらがっているようだ」

彼が言った、「頭が正常に戻る時」に書いたのだろう。認知症に苦悩し、必死に出口を探しているような書きぶりを讀むと、心臓を鷲掴みにされたように感じた。

## 十七歳の少女

「牧岡さん。ちょっと問題がある患者がいるんですけど、牧岡さんに担当していただくこうと思っっているんです」

問題がない患者はそもそも精神病院に入院してないんじゃない？ 言いはしなかったが、マキちゃんの言葉を聞いてそう思った。

「十七歳の、女の子です」

「えっ」

つい言葉に出してしまった。マキちゃんの視線が冷たいように感じたのは、気のせいだろうか。

「実父に虐待されていて、施設に保護されたんですが、精神的に不安定なんです」

「不安定って、どう不安定なんですか？ リストカットとか？」

「会えば、分かります」

マキちゃんの突き放した指導は勉強になるよ、全く。可愛い顔してあげつないんだからさ。

十七歳の少女、佐藤葵の病室に一步入ると、マキちゃんが言っていた「会えば、分かります」の意味が本当に死ぬほど分かった。

「おとうちゃん!」

葵はいきなり抱きついてきたのだ。俺は狼狽した。だって、女を抱いたのなんて三年ぶりだったから。あ、風俗は除外して。

「おとうちゃん、どこ行ってたの？ 葵、寂しかったんだよ」

「俺は、おとうちゃんじゃないよ」

「嘘。おとうちゃんと同じ匂いがするもん」

ケース記録によると、葵の父親は四十九歳のはずだ。シヨックだ。俺はそんなオヤジと同じ匂いがするのか。葵の身体から漂ってくる香りは、香水も何もつけていないはずなのに、優しい果物のような刺激があった。

「ねえ、やるう?」

「え?」

葵はそう言うと、後ろ向きにベッドに身体を投げ、下着を脱いで足を大きく開いた。

「ちよつと、何するの!」

さすがの俺も目を逸らした。

「いつもみたいに、やるうよ。おとうちゃん、優しいもん。やってる時」

「やめなさい!」

少し強く言い過ぎたかな。言ってから後悔した。

「おとうちゃん?」

葵は立ち上がり、再び俺の側に歩み寄った。また体臭が匂ってくる。やばい。下半身が反応してしまう。

「おとうちゃん、ここ、こんなんだよ? やるうよ?」

葵が指さす先に、膨張した俺の欲望の塊があった。

「ポケットにね、折り畳み傘入れているんだよ。最近の折り畳み傘は小さいんだよ」

「嘘。だって、ほら」

「うわ!」

その場所を触られそうになり、飛び上がるように後ろに下がった。

「また、来るよ」

それだけ伝えて病室から出る。これ以上居続けると理性が吹っ飛びそうだ。

葵の病室の扉を閉め、脂汗を拭った。厄介な患者だ。本当に厄介だ。

「どうでした? 葵ちゃん」

マキちゃんは外で待機していたのだろう。すぐに声をかけられた。

「どうもごうも。びっくりしました」

「あの、牧岡、さん。その……」

「あ」

俺のマグナムはいつでも発射できるようにスタンバイしたままだった。しまった。最悪だ。でも恥ずかしそうに横を向いているマキちゃんも、いいな。

## 歓送迎会

五月の中旬、市立病院全体で歓送迎会があつた。当直や夜勤者を除いたメンバーがみんな参加した。歓送迎会が遅くなったのは、三月に大地震が発生してばたばたしていたからだ。

「どうだ。MSWは」

黒島課長に声をかけられながらビールをつがれる。

「まだ一ヶ月半ですからね。何とかやっているといった感じですよ」「やりがいはあるか？」

「そうですね。あると思います」

そう答えてみたものの、まだ良く分からなかった。ただ、一つだけ言えることは、MSWという仕事に、退職願を叩きつけたいほどの嫌悪感は抱いていなかった。

「マルセイつっても人間だ。色々なやつらがいる。だからこつちもいろいろな職員を揃えなきゃならん。福祉を専門にやってきた者ばかりではなく、君みたいに法律とか、経済とか、理系とか、いろいろな職員がいた方が、俺はいいと思う。税務畑を歩んできたやつとか、地域振興をずっとやってきたやつとか、そういうのがいるほうが、職員のバランスはいいんだよ」

マルセイつて、精神障害者の「精」の字を丸で囲んだ隠語だけど、今時そんな言葉使ったら市民から苦情の投書が来ますよ。頭の中身が古いな、黒島さんは。来年の三月で定年だから仕方ないか。

「私は、福祉に向いているんですかね？ 自分では良く分からないんですけど」

「向いているかどうかは、君が決めることじゃない。周りが決めることだ」

黒島課長は「がはは」と大きく笑いながら、俺の背中をバンバンと乱暴に叩いて違うテーブルに移動した。課長の大柄で分厚い背中をぼんやりと見ていると、声をかけられた。

「牧岡さん。どうですか？ 一月半経って」

マキちゃんだった。暴走マグナム事件以来、何となく彼女を避けていたが、こうして声をかけてくれるんだから別に気にしていないようだ。良かった。

「何とか、やれてますけど、入江さんのおかげですよ」

「何言ってるんですか。鈴木さんをすぐに退院させちゃったし。」

田中さんも、牧岡さんが担当になってから全然怒鳴らなくなっただけですよ。まあ、亡くなっちゃったけど」

田中の達筆な文字が目に見えなくて、それをかき消すようにグラスのビールを飲み干した。

「牧岡さん。MSWになって、良かったと思います？」

俺のグラスにビールを注ぎながら、マキちゃんは言う。

「良かったか、良くなかったか、まだ分からないですね」

マキちゃんはすごいよな。事務からMSWにさせられて一年でもう一人前なんだから。俺なんてとても真似できないよ。

「牧岡さんは素質ありますよ。絶対」

「うそ？」

「嘘じゃないですよ。ほんと」

八重歯を出してえくぼを強調し、マキちゃんは笑った。彼女が上半身を大きく揺らすので、二の腕が俺の腕に当たった。柔らかくて、弾力が心地良くて、女の物としか思えない体臭がちょっと匂ってきて、むくむくと起き上がろうとするマグナムを押さえつけるのに必死だった。

## 見えぬ出口

「おとうちゃん」

葵の病室に入る度に、彼女は俺に抱きついてきた。世間では、十八才未満の女の子と抱き合ったりしたら罪になるのだろうか。そう考えると胸が痛くなるほど鼓動が速く打った。

「俺は、おとうちゃんじゃないよ」

「うそ。おとうちゃんは、優しいんだよ。やってる時は」

この子は、十二歳の時に父親に犯されて、五年近くおもちやのよに扱われていた。父親との間にできた子供を墮胎したこともあるようだ。父子家庭で、父親はろくに働かず、生活保護を受給していた。普段は酒を飲んで暴力をふるう父親が、セックスの時だけは優しくなるので、葵は優しくしてもらうため、身体を開放してしまうのだ。父親が管理売春で逮捕されて、この子はやっと保護された。保護された時、多くの男達の欲望のはけ口とされていた葵は、抱いてくれる男がいないと生きていけない身体になっていた。

「優しくしてもらいたいの？」

「うん」

「そんなことしなくたって、優しくしてあげるよ」

「うそ。してくれないよ。お酒ばかり飲んで、怒鳴るし、殴られるよ」

「そんなことはしない。誓う」

「うそ。うそ！」

葵は中々心を開いてくれなかった。自分の身体を抱いてくれることを要求する。勿論俺はそんなことはできない。平行線が続いた。

「入江さん。佐藤葵は女性が担当した方がいいんじゃないですか？ 男だと、彼女どうも父親と重ねちゃうみたいで」

たまりかねて、マキちゃんにそう相談してみた。

「それが、駄目なんですよ。あの子、母親を知らないから、女性職員だと敵意をむき出しにしてくるんです」

「そうですか……」

佐藤葵は俺がMSWになってから最大の難敵だった。第一、俺は恋人も長らくいないし、仲が良い女友達もない。女性と接することに慣れていないのに、十五歳も年下の子を相手にさせられるんだ。手こずるはずだ。

「おとうちゃん」

「おとうちゃんじゃないよ」

「うそ、おとうちゃんの匂いがする」

まじかよ。加齢臭かよ。シヨック……

「とりあえず、俺は君を担当させてもらう牧岡です」

「牧岡のおとうちゃん」

「……」

そういうやり取りが三週間も続いた。彼女は父親以外にも、大人の男達を受け入れていた。日に十人の相手をすることもあったようだ。しかも男をあてがっていたのが実の父親。娘の身体で荒稼ぎしていたようなやつは一生刑務所から出てくるな。

## 迷宮

葵の担当になって、毎日彼女の病室を訪れていると、気になることがあった。西島慶太という葵と同じ年の患者が、葵の病室をちらちらと気にするようになっているのだ。彼が葵に気があることは明らかだった。ちなみに、慶太はうつ病で入院してはいたが軽症で、退院が近付いていた。

談話スペースで二人がたまたま一緒になったことがあった。慶太が話しかけたのだが、葵は彼を無視して立ち去った。葵にとって、慶太は男ではない。加齢臭もしないし、身体も発展途上で細すぎる。手足にもあまり毛がなく、髭もほとんど生えていない。父親くらいの大人の男でないと、葵は心が満たされないのだ。男臭いむさくるしさに包まれないと、葵は満足できないのだ。

どうすればいい？ どうすれば葵の目を覚ますことができるのだろうか？ 彼女の脳みその皺一本一本にまで染み込んだ、大人の男への性的な欲求を、俺はどうすれば取り除けるのか、あれやこれや考えた。休日でも葵のことが頭から離れなかった。

「牧岡さん、バイクに乗られるんですか？」

「……え？ ああ、乗りますよ、一応」

事務所の机で葵への対応策を練っていると、突然マキちゃんに声をかけられたので、慌てて返事をした。声が少し上ずった。彼女は俺の机の上にある、バイク屋にもらった卓上カレンダーを指さしていた。

「なんてバイクなんですか？」

「DUCATIのS4Rっていうバイクです。イタリアのメーカー」

「へー、イタリアって格好いいですね！ 何CCなんですか？」

「一〇〇〇〇」

「すごーい。今度、後ろに乗せてくださいね」

そう言っマキちゃんは、喉飴を一つ俺の机に置いて、目配せをしながら自分の席に戻っていった。俺はもらった喉飴を口に放り込みながら、社交辞令じゃなかったらいいのにな……と思いつつマキちゃんの背中を見つめていた。「今度、後ろに乗せてください」今まで何度も言われてきた台詞だが、実際に後ろに乗ってくれたのは大学時代の同級生、北村ブタ美だけだった。本名は忘れた。相撲部屋から来たような女で、後ろに乗せると簡単にウィリーしてしまい本気でこけそうになったっけ。

## 賭け

「おとうちゃん」

今日も葵は俺をそう呼ぶ。俺、まだ三十二なんですけど。そんなに匂う？ 加齢臭。

「葵は、優しくされたいんだよね？」

「うん！ やってくれるの？」

「いや。俺は葵が嫌いだ。大っ嫌いだ。だからお前を殴る」

右の拳を堅く握って振り上げた。葵が顔を一瞬でこわばらせる。胸が苦しくなつて直視できなかつた。彼女が父親に暴力を振るわれる時、こういう顔をしたのだろう。ごめん。葵。ごめん。

「やめろ！」

その時、病室のドアが開いて慶太が飛び込んできた。こいつはいつも葵の様子を伺っていた。すぐに中の異変に気付くことは分かっていた。

「なんだ、お前は？」

慶太の胸倉をつかんで睨みつけた。彼の細い身体は軽い。慶太は震えていた。しかし視線を、俺の目から絶対に離さなかつた。

(殴れ)

小声で、慶太にだけ聞こえるように言った。

(殴れ。葵を守ってやれ)

慶太が思いつきり振り抜いた拳が、俺の左頬に炸裂した。演技をしようと思っていたがその必要もない。それくらいの衝撃だった。俺は背中から病室の床に叩きつけられた。

このクソガキ。殴ったふりすりゃいいんだよ。本気で殴るやつがあるかボケ。

慶太は通せんぼをするように両手を広げて、隅で小さくなっている葵を守っている。葵は慶太の肩に手を置き、すがりついている。俺はひりひりする左頬を押さえながら、逃げるように葵の病室を飛

び出た。

「どうしたんですか？」

喧騒に気付いて駆け付けたマキちゃんに声をかけられた。

「何でも、ないですよ」

本当に痛む左頬を抑えたまま、ごまかすように答えた。

MSW

「おい、牧岡」

定時近くなつて、黒島課長に呼ばれた。お叱りのお言葉かな。まあ仕方ない。

「お前、無茶苦茶やったな」

「いえ、すみません」

「とんでもない荒治療だな」

「治療になりましたか？」

「佐藤葵を見てみるよ。あれから西島慶太とずっと一緒にいるぞ」  
良かった。何とか成功したか。

「西島は真面目な子だ。葵を不幸にはさせないだろう。彼の一途さが伝われば、葵は変わる」

俺は大きくうなずいた。

「全く。俺の期待通りだったよ」

「え？」

「お前を引っこ抜いたのは俺だ。荒削りだが、期待通りにやってくれたよ、牧岡は」

「いえ……」

「どうだ？ MSWは」

「そうですね……」

愛犬のたま吉を抱いてにんまりとする鈴木数子、顔中皺くちやにして笑う田中正八、西島慶太の肩に手を置いて怯える佐藤葵。彼らの顔が思い浮かんだ。たった今見たかのように思い出せた。

「やれるだけ、やってみます」

「がはは」

黒島課長は俺の肩をバンバン叩く。これが結構痛い。あ、そういえば鈴木飼いの犬はたま吉じゃなくてたる吉だったっけ？ たに吉だっけか？ まあいいや。

「牧岡さん」

課長席から自分の席に戻り、定時が終わって机の整理をしていると、マキちゃんに話しかけられた。

「何ですか？」

「葵ちゃん、すごいですね。あんな方法、私じゃ考えつかないですよ」

「いやいや、たまたま思いついてうまくいっただけです」

「MSWらしくなってきましたね」

八重歯がきらりと光った。

「マキちゃんのおかげですよ」

「え？」

「あっ」

しまった。マキちゃんって呼んじまったよ……。

「いいですよ。マキちゃん。私も名前で呼ばれたい」

また八重歯が光った。まぶし過ぎて脳振頭を起こしそうだ。

「バイク、いつ乗せてくれますか？」

「え？ ああ。あれ？ 社交辞令じゃなかったの？」

「じゃなかったの！ とりあえず、どこ行くか決めましょう。今

日は暑かったから、喉でも潤しながら」

下から覗いているマキちゃんの大きな瞳が、俺の中に飛び込んできそうに思えて、のけ反ってぶっ倒れるんじゃないかとさえ感じた。視界の端には黒島課長がにやにやする顔がぼんやりと映っている。

黒島さん。今度ばかりはあんたに礼を言うよ。俺を市立病院に呼んでくれてありがとう。天使に巡り合わせてくれてありがとう。お返しに、俺はMSWとして、この病院の患者たちみんなの天使になつてやるよ。なんてね。それはさすがに臭いか。

「牧岡さん、早く！」

くだらない妄想を巡らせていると、帰り支度を終えたマキちゃんが事務所を出ようとしているところだったので、慌てて彼女の背中

を追いかけた。

## MSW（後書き）

この作品は、軽いタッチで書き上げるように心がけました。随所に笑いも盛り込み、さらりと読めるようにしました。内容が結構重たいので、それを重く感じさせないように努力しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4591t/>

---

MSW

2011年5月23日09時19分発行